

博士学位論文

(内容の要旨及び論文審査の結果の要旨)

CAO YI

氏名 曹 毅
学位の種類 博士 (工学)
学位記番号 博 甲 第 63 号
学位授与 令和 4 年 3 月 23 日
学位授与条件 学位規程第 3 条第 3 項該当
論文題目 中国・四川省の元・明代の寺廟建築に関する研究 ―三間仏殿と単層裳階付仏殿を中心として―
A STUDY ON THE TEMPLE BUILDINGS IN YUAN AND MING
DYNASTIES IN SICHUAN PROVINCE, CHINA
– Centered on Three Bay Type and Single-layer with under roof –
論文審査委員 (主査) 教授 杉野 丞¹
(審査委員) 教授 中井 孝幸¹ 教授 瀬古 繁喜¹ 教授 溝口 正人²

論文内容の要旨

中国・四川省の元・明代の寺廟建築に関する研究 ―三間仏殿と単層裳階付仏殿を中心として―
(A STUDY ON THE TEMPLE BUILDINGS IN YUAN AND MING DYNASTIES IN SICHUAN PROVINCE, CHINA – Centered on Three Bay Type and Single-layer with under roof–)

中国は、5000 年の歴史を有し、古代から近世までの歴史的遺産は膨大な数に上る。それらの遺産は、漢族を中心とする歴史・文化をあらわし、遺跡・遺物・美術・工芸・建築など幅広い分野に亘っている。それらの歴史的遺産が高く評価されたのは近代以降であり、学術的価値を見出したのは欧米の研究者であった。1900 年代初頭に敦煌・莫高窟が英国、仏国、米国、露国の研究者により発掘され、今世紀最大の歴史的発見と称されたが、同時に多くの絵画、彫刻、古文書などが海外に持ち出された。その後、中華人民共和国が成立し、国内では政治的な変革期を迎え、1960 年代の文化大革命により、中国各地の仏教遺産が悉く破壊され、2000 年代の経済発展により、全国の歴史的建造物も急速に失われた。2010 年代以降、政府による歴史的建造物の保護政策が行われ、世界遺産の登録、重点文物の指定も増し、近年は歴史的建造物の修復・保存が行われてい

る。しかし、中国の歴史的建造物に対する学術的な研究は、今尚その途上にある。

本論文は、中国・四川省の元・明代の寺廟建築について、三間仏殿ならびに単層裳階付仏殿を中心とする建築的な特質を検討したものである。四川省の仏教・道教・廟の建築は、古代・中世の遺構が残されており、考古学の発掘成果により、その一部が検討されている。同省の元・明代の寺廟建築については、個々の遺構の調査が行われているものの、同省の地域的な寺廟建築の特徴は明らかにされていない。そこで、本論文では四川省の元・明代の寺廟建築の建築的な特質を明らかにすることを目指している。

本論文は、六章からなる。

第一章では、「序論」として本論文の研究背景、既往研究、研究目的、研究方法、論文構成について述べている。四川省の寺廟建築は、元・明代の三間仏殿ならびに単層裳階付仏殿が比較的に良く残されているため、これらの遺構を対象とし、各寺院の由緒・沿革について史料より検証し、それらの建築遺構の平面・構造・意匠等の分析・検討の手法を述べ、本論文の位置づけを行っている。

第二章では、「四川省の寺廟建築の歴史的背景」について、次の点を述べている。「四川省の地勢と歴史」については、四川省は、古代の古蜀文明の発祥地とされ、長江の源流地である中国・西南地方にあって、周囲を 3000m～5000m 級の山々が取り囲み、成都を中心とする四川盆地を

1 愛知工業大学 工学部 建築学科 (豊田市)

2 名古屋市立大学 (名古屋市)

形成している。この地は、多くの河川が流れ、天府の国と呼ばれる肥沃な土地として広く知られる。「四川省の宗教」については、同省では漢代に仏教が伝わり、隋・唐代に陝西省・河南省から仏教文化が本格的に伝えられた。また、中国の民間信仰から形成された道教も浸透し、唐代には四川省の仏教と道教は隆盛を誇り、いずれも四大聖地の一つに数えられた。さらに、西部・北部の少数民族の地域にはチベット仏教・イスラム教が伝わったが、中国仏教が大勢を占めた。「四川省の寺廟建築」については、唐・宋代以降に数多くの寺廟建築が建てられたが、戦乱や災害によりその大半が失われ、現存最古の木造建築は南宋代の江油市・雲岩寺輪藏である。それ以降は、元・明代の三間仏殿と単層裳階付仏殿の遺構が比較的によく残されており、それらの歴史的な背景を述べている。

第三章では、「四川省の元・明代の三間仏殿」について、三間仏殿の遺構 20 棟を取り上げ、仏教、道教、廟の歴史を述べて建立年代を示している。「平面寸法と柱配列」については、三間仏殿の桁行と梁行の規模を示し、中間と脇間の柱間寸法について、中間が脇間の約 2 倍の広さをもつ点に特徴があることを指摘している。「間架と架構システム」については、三間仏殿の構造は、柱上に斗拱をおき、柱間に梁を渡して束で棟木を支える抬梁式を基本とする。また、建物の梁行断面に現れる母屋桁の間隔である「間架」は主屋を 4 架とし、庇には 1 架、2 架、3 架の 3 種類を用い、内部架構は主屋柱と側柱の間に繫梁を 1 重、2 重に架け、繫梁上に大瓶束を立てて母屋桁を支えるのが一般的である。「斗拱と中備」については、三間仏殿には三手先、二手先、一手先、持出梁を用いるが、建物全体に同一の斗拱を用いず、正面に三手先、側面に二手先、背面に一手先或いは持出梁のように手先数を減じるものが多く、斗拱の高さの違いを柱高の調整により対応している点に特徴がある。「登梁と尾垂木尻」については、三間仏殿の正面中間を広く取ったため、柱間の中央に大型登梁を用いて屋根荷重を分散させた点、側柱の中備斗拱では真昂尾垂木に代わって湾曲した登梁状の尾垂木尻を用い、中備による構造的な補強を行った点に特徴が認められた。

第四章では、「四川省の明代の一間裳階付仏殿」について、一間裳階付仏殿の遺構 12 棟を取り上げ、各建物の由緒・沿革を述べた。「平面寸法と柱間配置」については、桁行と梁行の総間寸法は、正方形とは限らず横長平面のものが多くあり、脇間と中間の比率は約 2 倍となるが、これは斗拱の詰組の配列と深く関わっている。「間架と架構システム」については、抬梁式を基本とし、間架は主屋部分を 4 架とし、裳階部分では 2 架にとって繫梁の中央に大瓶束を立て、この大瓶束の上に斗拱を置いて主屋屋根を支え、下に裳階屋根を取り付けている点に特徴がある。「斗拱の形態」については、五手先、四手先、三手先、二手先、一手先などが用いられ、主屋の手先を裳階より増やすものが

多く、建物に重厚感を高める意匠としている。また、仏殿正面には斗拱の意匠的な効果を求め、斜拱を用いるものが増し、さらに二葉拱、三葉拱を連結した鴛鴦斗拱を用いるものが現れ、一層の華やかさを増している。「天井の形態」については、内部空間は主屋に格天井を張るものが多いが、高さを強調するために中央に八角形の藻井天井を設けるものが現れている。

第五章では、「四川省の明代の三間裳階付仏殿」について、5 棟の遺構を取り上げて各建物の由緒・沿革と構造形式を述べている。「平面寸法と柱間配置」については、桁行、梁行の総長を眺めるといずれも横長の長方形平面とし、桁行と梁行の平均比率は 1.0 : 0.66 であり、正面の端間：脇間：中間の柱間比率は裳階 1 架のものでは 1.0 : 2.6 : 3.2 であり、2 架のものでは 1.0 : 1.25 : 1.4 としている。これは、庇 2 架のものでは庇の繫梁上に大瓶束を立て、斗拱を置いて主屋の大屋根を支え、大瓶束の下方に裳階屋根を取り付ける。そのため、外観は庇 2 架のものも裳階部分の 1 架が外に現れ、主屋柱に裳階を取り付けた 1 架のものに近い外観となる。「間架と架構システム」については、主屋は 4 架、6 架、8 架とするもの、裳階は 1 架、2 架があり、2 架のものでは繫梁に大瓶束を立て、その内側は主屋と裳階の中間的な空間を生み出している。「斗拱の形態」については、四手先、三手先、二手先等が用いられ、主屋斗拱の手先を増して重厚感を示すものがある。また、斗拱には出肘木の先端に秤肘木を用いる計心造と用いない偷心造があるが、これらに偷心造は無く、両者を併用した複合式と全計心造が半数ずつを占めている。尾垂木と尾垂木尻は、主屋と裳階の斗拱に真昂尾垂木を用い無くなったため、中備斗拱に湾曲した尾垂木尻を用いて構造的な安定を図るものが現れている。

第六章では、「結論」として、第二章から第五章までの内容を総括している。本論文の成果は、中国・四川省の三間仏殿と単層裳階付仏殿に見られる共通性と相違点を指摘し、地域的な特質を述べた点である。本論文の意義は、中国建築史学における新たな視点、すなわち中国の四川省における元・明代の寺廟建築の特徴を示したことで、華北・華中・華南地方の建築との比較が可能となり、中国の寺廟建築における地域性の解明への端緒を開いた点にある。

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国・四川省の元・明代の寺廟建築について、三間仏殿ならびに単層裳階付仏殿を中心とする建築的特質を論じたものである。四川省の仏教・道教・廟の建築は、古代・中世に遡る遺構は残されませんが、元・明時代の遺構は比較的によく残されている。これらの寺廟建築につ

いては、個々の遺構の調査は行われているが、同省の地域的な寺廟建築の特徴は明らかにされていない。そこで、本論文では四川省の元・明代の寺廟建築の地域的な特質を明らかにすることを目指している。

本論文は、六章からなる。

第一章では、「序論」として本論文の研究背景、既往研究、研究目的、研究方法、論文構成について述べている。四川省の元・明代の三間仏殿ならびに単層裳階付仏殿について、これらの仏教・道教寺院と廟所の由緒・沿革を史料により検証し、建築遺構の現地調査に基づく平面・構造・意匠の資料の分析方法を述べ、本論文の位置づけを行っている。

第二章では、「四川省の寺廟建築の歴史的背景」について、次の点を述べている。「四川省の地勢と歴史」について、同省は、古代の古蜀文明の発祥地とされ、長江の源流地である中国・西南地方にあり、周囲を3000m級の山々が取り囲み、成都を中心とする四川盆地を形成しており、多くの河川が流れ、天府の国と呼ばれる肥沃な土地である。

「四川省の宗教」については、漢代に仏教が伝わり、隋・唐代に陝西・河南省から仏教文化が本格的に伝えられた。また、中国の民間信仰から成立した道教も浸透しており、唐代には四川省の仏教と道教は隆盛を誇り、後に峨眉山、青城山は四大聖地の一つに数えられる。「四川省の寺廟建築」について、唐・宋代に多くの寺廟建築が建てられたが、戦乱・災害により大半が失われ、現存最古の建築は南宋代の江油市・雲岩寺輪蔵である。しかし、元・明代の三間仏殿と単層裳階付仏殿の遺構はよく残され、これらの建築は当地域の歴史的な背景、周辺地域の影響により、独自の建築文化を形成する環境にあったことを指摘している。

第三章では、「四川省の元・明代の三間仏殿」について、三間仏殿の遺構20棟を取り上げ、各建物の由緒と建立年代を示し、次の点を述べている。「平面寸法と柱配列」について、三間仏殿の規模と平面形態を示し、中間と脇間の柱間寸法において、中間が脇間の約2倍～3倍の広さをもつ点を指摘している。「間架と架構システム」について、三間仏殿の構造は、柱上に斗拱をおき、柱間に梁を渡して東で棟木を支える抬梁式を基本としている。また、建物の梁行断面の母屋桁の間隔である「間架」は主屋に4架、庇に1架、2架、3架の3種を用いており、内部架構は主屋柱と側柱の間に繫梁を1重、2重に架け、繫梁上に大瓶束を立てて母屋桁を支えるものが一般的である。「斗拱と中備」について、三間仏殿では周囲に同一斗拱を用いず、正面に三手先、側面に二手先、背面に一手先或いは持出梁のように手先数を減じるものが多い点、斗拱の高さの違いを柱高の調整している点に特徴があることを指摘している。「登梁と尾垂木尻」について、三間仏殿では正面中間を広く取ったため、柱間の中央に大型登梁を用いて屋根荷重を支持した点、周囲側柱の中備斗拱

では真昂尾垂木が用いられなくなったために湾曲した登梁状の尾垂木尻を用いて構造的な補強を行った点を指摘している。

第四章では、「四川省の明代の一間裳階付仏殿」について、一間裳階付仏殿の遺構12棟を取り上げ、次の点を述べている。「平面寸法と柱間配置」について、平面形態は、正方形と僅かに横長長方形のものがあり、脇間に対する中間の比率は約2倍とし、これは斗拱の詰組の配列に深く関わっている。「間架と架構システム」については、構造は抬梁式とし、間架は主屋部分を4架とし、裳階部分では2架にとって繫梁の中央に大瓶束を立て、この束上に斗拱を置いて主屋屋根を支え、束上部に裳階屋根を取り付けている点に特徴がある。「斗拱の形態」については、五手先、四手先、三手先、二手先、一手先が用いられ、主屋の手先を裳階より増やすことで、建物に重厚感を生み出している。また、仏殿正面では斗拱の意匠的な効果を求め、斜拱を用いるものが増し、二葉拱、三葉拱を連結した鴛鴦交斗拱を用いるものが現れ、一層華やかさを増している。「天井の形態」については、内部空間は主屋に格天井を張るものが多いが、高さを強調するため中央に八角形の藻井天井を張るものが現れている。

第五章では、「四川省の明代の三間裳階付仏殿」について、5棟の遺構の由緒と構造形式を示し、次の点を述べている。「平面寸法と柱間配置」については、桁行、梁行の総長を見ると横長の長方形平面とし、正側面の平均比率は1.0:0.66であり、正面の端間:脇間:中間の柱間比率は裳階1架のものでは1.0:2.6:3.2であり、2架のものでは1.0:1.25:1.4である。これは、庇2架では庇の繫梁上に大瓶束を立て、斗拱を置いて主屋の大屋根を支え、大瓶束の下方に裳階屋根を取り付けている。そのため、外観は庇2架のものも裳階部分の1架が外に現れ、主屋柱に裳階を取り付けた1架のものに近い外観となる。「間架と架構システム」については、主屋は4架、6架、8架とするもの、裳階は1架、2架とするものがあり、2架のものでは繫梁に大瓶束を立て、その内側は主屋と裳階の中間的な空間を生み出している。「斗拱の形態」については、四手先、三手先、二手先等を用い、主屋斗拱の手先を裳階斗拱より増して重厚感を示すものがある。また、斗拱には手先肘木の先端に秤肘木を用いる計心造と用いない偷心造があるが、ここには偷心造が無く、両者を併用した複合式と全計心造が半数ずつを占める。尾垂木は、主屋と裳階の斗拱に真昂尾垂木を用い無くなったため、中備斗拱に湾曲した尾垂木尻を用いて構造的な安定を図るものが現れている。

第六章では、「結論」として第二章から第五章までの内容を総括している。本論文の成果は、中国・四川省の元・明代の三間仏殿と単層裳階付仏殿に見られる特徴を指摘し、同省の地域的な特質を解明した点にある。

本研究の意義は、中国建築史学における新たな視点、すなわち中国の四川省における元・明代の寺廟建築の特質を示したことにより、華北・華中・華南地方の同時代の建築との比較検討が可能となり、中国の寺廟建築における地域性の解明への端緒を開いた点にある。今後、華北、華中、華南地方において、地域性の解明に関する研究が進展することが期待される。この研究成果は、日中両国の建築史学のみならず、歴史学、宗教史、美術史など、関連史学にも貢献し得るものと期待される。

よって、本論文は博士論文として学術的な水準を満たしているものと判断した。